

伊丹市文化財ボランティアの会 【自由研究】

『西郷隆盛に学ぶ人間力』



末次 弘幸

趣旨

- 西郷隆盛は薩摩の貧しい下級武士出身だが、主君・島津斉彬に見出されて、頭角を現した。
- だが、斉彬死後薩摩藩の権力者となった島津久光に嫌われ、遠島流罪の憂き目に遭う。
- 辛い経験にも耐え、**明治維新の立役者**となる。維新三傑（西郷・大久保・木戸）の一人だが、明治6年の政変（朝鮮への使節派遣問題）で下野。
- 1877年（明治10）9月、西南戦争の最後の戦地となった城山にて死去（満49歳）。
- 波乱にみちた人生、歴史的功績、人間的魅力を紹介する。

1. 時代背景概観(江戸時代後期～明治初期)

a. 19世紀初頭:200年以上続いていた徳川幕府が内憂外患で動揺し始めた時期。

- 慢性化した幕府の財政難が天保の大飢饉(1833-1839年)などによりさらに悪化。
- 露・英・米などの外国船が日本沿岸に現れ、開国(貿易・開港)を迫る。

b. 西郷隆盛の誕生(1827年12月7日)

激動期に生を受けた西郷だが、旧体制を壊し、新時代を開いていくことになる。

c. ペリー2度の来航(1853年6月、1854年1月)と日米和親条約(1854年3月)

時代背景概観(2)

d. 徳川幕藩体制の弱体化。欧米列強と対峙していくには、**挙国一致体制の中央集権国家が必要**との意見強まる中で、薩長同盟(1866年1月)から倒幕へと展開。

e. 大政奉還(1867年10月)→徳川幕府が朝廷に政権を返上

f. 明治天皇のもとに公家・雄藩大名・藩士などからなる王政復古政府の発足(1867年12月*)
→260年以上続いた徳川幕府倒れる。

* 小御所会議: 徳川慶喜の辞官納地がテーマ

時代背景概観(3)

g. 1868年1月、鳥羽伏見の戦い(薩長両藩兵中心の新政府軍vs旧幕府軍)を皮切りに、

戊辰戦争が始まる。

戦いは江戸、東北、蝦夷地と展開し、翌年新政府軍の勝利で終わる。

* 徳川慶喜を新政府から排除するための戦いと言えようか。

h. 中央集権体制の確立を目指し、版籍奉還(1869年)と廃藩置県(1871年)断行。

i. 欧米列強に追いつくべく、新政府は「富国強兵・殖産興業」策を推進。

2. 西郷と同時代を生きた人たち

- 島津斉彬(1809－1858)：西郷を庭方役に抜擢し指導した名君で、最大の恩人。
* 斉彬がいなければ、西郷は薩摩の心優しき、下級役人で生涯を終えたと思われる。
- 島津久光(1817－1887)：西郷と敵対し、最後の最後まで苦しめた、最大の敵。
- 大久保利通(1830－1878)：維新三傑の一人。西郷の盟友と言われるが、西郷をたびたび【防壁】【風よけ】として利用し、最後は陰謀で西郷を蹴落とした。

西郷と同時代を生きた人たち(2)

- 木戸孝允(1833－1877)：維新三傑の一人。西郷・大久保に反対することが多く、**三傑として良いのか。**
- 坂本龍馬(1835－1867)：薩長同盟の仲介者。独自の新国家構想を持つも暗殺さる。
- 勝海舟(1823－1899)：幕臣。江戸無血開城の交渉相手。西郷を高く評価していた。
- 徳川慶喜(1837－1913)：15代将軍。討幕運動をかわすべく、大政奉還を行う。
- 明治天皇(1852－1912)：1867年1月、14歳で皇位継承。西郷を寵愛した。

3. 波乱にみちた人生

◆誕生：1827年(文政10) 12月、薩摩藩下級武士の長男として生まれる。幼名小吉。

◆元服：1841年(天保12)、吉之助隆永となる。

◆門出：1844年(弘化元)、18歳で藩の郡方書役助(農政・税務事務担当者)となる。

- ・ 最初の上司の郡奉行迫田太次右衛門は、農民のことを第一に考える気骨ある人物で、その影響を受ける。藩の上層部あてに農政全般に関する建白書を頻繁に提出。

＊郡方書役：藩内を巡回し、道路・橋・灌漑設備などの普請、米の出来具合を確かめ、年貢徴収の監督にあたる。

3. 波乱にみちた人生(2)

◆**抜擢**: 西郷の建白書を読んでいた**主君斉彬**から、**その側近として抜擢**される。

- 1854年1月、斉彬の江戸参勤に従い、江戸へ出府。4月、庭方役に任命される。
- 庭方役は藩主直属の密偵で使い走り。斉彬の指令を受けて、密書を他藩に届ける、情報を収集するなどの役割を担う。将軍継嗣問題では慶喜擁立へ向けて水戸藩・越前藩との連絡・連携や京都へ出向き朝廷工作などを行う。
- **斉彬は何かにつけて西郷を諭し、外部の有為な人物に接触させ、視野を広げるよう指導・教育した。**
→「薩摩だけではなく、日本に、世界に目を向けよ」

島津 斉彬



島津斉彬画像 ■ 尚古集成館蔵



島津斉彬銅像 ■ 鹿児島市照国町

斉彬の西郷評

- 斉彬→松平慶永（春嶽）

「私、家来多数あれども、誰も間に合うものなし。
西郷一人は薩国貴重の大宝なり。」

しかしながら、彼は独立の気象あるが故に、
彼を使う者、私ならではのまじく」

3. 波乱にみちた人生(3)

◆暗転: 主君斉彬の急死により人生最大のピンチ(自殺未遂から遠島へ)に遭遇。

- 斉彬のあと薩摩藩の実権を握った島津久光とは相性が悪く、冷遇される。
- 1858年11月、幕府に追われる月照との入水事件を起こすが、西郷だけが助かり、奄美大島への潜居を命じられる。
- 1862年2月に鹿児島島に戻るが、久光の命令に違反、2度目の離島生活(沖永良部島)を余儀なくされる。
- 厳しい生活の中、書を読み、思索を深め、自己を見つめ直すなどの雌伏の時期を経て、己を鍛え直し、思慮深く、志操堅固な人物のレベルまで成長していった。→尖った西郷が丸くなった。

島津久光(いかにも意地が悪そうにみえるが)



島津久光画像 ■ 尚古集成館蔵

3. 波乱にみちた人生(4)

- ◆雄飛：流罪から政治の表舞台へ。倒幕・新国家建設へ向けて、辣腕をふるう。
- 1864年2月、召喚の命を受けて、鹿児島に戻る。3月薩摩藩の軍賦役に任命される。
- 1864年7月、禁門の変(初陣)で長州兵を撃退。全国に名が知られるようになる。
- 1866年1月、薩長同盟を結ぶ→倒幕へ加速。
- 1867年10月、大政奉還。徳川慶喜が倒幕をかわすために打った奇策か。
- 1867年12月、王政復古の大号令。慶喜を排除した王政復古政府樹立。参与に就任。
- 1868年1月、鳥羽伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争はじまる。

3. 波乱にみちた人生(4)

- 1868年3月、勝海舟と会談。**江戸無血開城**決まる。
- 1869年5月、箱館で榎本武揚が降伏し、戊辰戦争おわる。
- ◆改革：徳川封建体制を破壊し、新国家づくりに従事
- 1871年6月、明治新政府の参議に就任
- **1871年7月、廃藩置県断行**
- 1871年11月、岩倉使節団で岩倉、大久保、木戸などが日本を離れた後、留守内閣の筆頭参議(首班)として近代化政策(学制の制定、鉄道開通、国立銀行条例、太陽暦の採用、徴兵令の布告、地租改正など)を推進。

補足：江戸無血開城

- ・ 勝海舟が、この時の西郷について語っている。

「西郷はおれの言うことを全て信用してくれた。
最後まで手を膝の上に置き正座を崩さず、敗軍の
将を軽蔑するような態度を見せなかった。

西郷のおかげで、江戸の百万の命と財産、徳川
家滅亡の危機が救われた。」

↑ 礼儀正しい西郷を語るエピソード

江戸開城談判(結城素明画:聖徳記念絵画館蔵)





MITSUBISHI MOTORS

江戸開城
西郷南洲
勝海舟
會見之地
西郷吉之助書

第一田町ビル





江戸開城
西郷南洲
勝海舟
會見之地
西郷吉之助書

田町薩摩郎(勝・西郷の会見地)附近沿革案内

この戦地は、明治維新前夜慶応4年3月14日幕府の陸軍総裁 勝海舟が江戸100万市民を悲惨な火から守るため、西郷隆盛と会話し江戸無血

